

火星

平成二十四年九月号



七曜抄 (八)

山尾玉藻

この暁のこの蟬声のなにならむ

嗚呼、夫は

暑をのがれ勝手に死んでしまひけり

蟬声にのこりし夫の尿袋

汗をして屍の夫につき行けり

祭壇の一気に成りし旱星

もう堪へなくてもよいと青葉木菟

夫有らぬ一部始終を守宮かな

喪にこもり暑にこもり声忘じぬし

よろめいて攔む虚空や旱星

打水の蟻流れつく夫の下駄

太白星

杉浦典子

みなづきの石のつめたき野面積
火の山の匂ひの中の袋掛
白あぢさゐ母の書き込みある楽譜
きつちりと巻き戻しけり落し文
よく揺るる枝を見てゐる端居かな
耳遠き夫の聞きとむ青葉木菟
頸重くゐて花栗の夜も匂ふ

浜口高子

牛蛙のひと声に山退りけり
草刈つて水音たかぶる千早村
纜の伸びて縮んで薄暑なる
葭障子祖父の句帖の失せしまま
平らなる鏡の中の夏の風邪
竹落葉に靴沈みをり鼻の声
いちばんに風につつまる帚草

火星作品

山尾玉藻選

鮎めしや兄に吃音ありしこと
神戸深澤鱻

色鯉に老いを見たりし籠枕

作り滝かなほうたるの失せやすし

ぎしぎしや河漲りて急ぐなし

津の國の堤の高き入梅かな

植ゑかへし薔薇によき雲生れにけり
八幡坂口夫佐子

あたりまへのやうに鷺ゐる植田風

踝へチワワのくしやみ籐筵

青芝をさざ波となり蝶ゆけり

朝曇子のくづかごに吾が写真

六月の朝日射し入る猪肉屋
大山文子

蛭蓆真つ直ぐ咲きて嫌はるる

ホルモンを捌く手せはし走り梅雨

日 焼 せ し 額 の 覗 く 顕 微 鏡
ひと 駅 ごと 青 田 色 増 す 丹 波 かな
親 燕 の せ は し き 背 を た た へ け り
焼 酎 の 升 を あ ふ る 芒 種 かな
人 影 の あ を し 白 夜 の 橋 の 上
一 本 の 笹 百 合 の 辺 の 梅 雨 に 入 る
麦 秋 や 畚 に ほ り こ む ラ ン ド セ ル
麦 秋 の 廻 し て 運 ぶ ワ イ ン 樽
足 ぬ ぐ ふ 母 に 十 薬 花 ざ か り
明 易 し 火 を 焚 い て ゐ る 登 山 口
年 寄 の 足 昏 れ や す し 花 し や う ぶ
母 す で に 屈 ん で ゐ た り 庭 花 火
能 な し と 叱 り て 夫 が そ ら ま め 剥 く
田 植 機 の 音 立 て て 過 ぐ 猿 田 彦
城 も 北 の 曇 り ぐ せ な る 行 々 子
峠 越 え の 花 背 は 昏 し 洗 鯉
鯖 の 酢 の に ご る 頃 な り 祭 笛

宝 塚 山 本 耀 子

大和郡山城 孝 子

宝 塚 松 井 倫 子

選のあとに

山尾 玉藻

鮎めしや兄に吃音ありしこと 深澤 鱧

「鮎めし」は鮎特有の芳香をただよわせる風情ある食べものであり、食すると自ずと静やかで細やかな心根となるのかも知れない。「鮎めし」を食べる兄を眺める作者の胸中もまたやすらかな思いで満たされているようだ。共に歳を重ねた兄への弟の細やかな情愛が伝わる一句である。

あたりまへのやうに驚める植田風 坂口夫佐子

植田に驚が佇む景は珍しいものではなく只事と言えるだろう。しかし、それを「あたりまへのやうに」と逆手に捉えたところが独自の発想となり、一句にアイロニカルな味を生んだ。何ごとに対しても普通ごとと見過さず、面白がり不思議がるのが新しい発想につながるのである。

六月の朝日射し入る猪肉屋 大山 文子

シーズンオフのがらんとした猪肉屋の情景ながら、「六月の朝日射し入る」と切り取ると一挙に瑞々しい詩が漂い始める。しかしながらあくまでも対象は「猪肉屋」であり、生気に満ちた朝日の届かないその奥に漂う暗さを充分に意識した一句である。

一本の笹百合の辺の梅雨に入る 松井 倫子

薄紅色の大輪の花を咲かせる「笹百合」は山地に生息する

百合であり、山中で思いがけずこの花に出会うとその美しさに強くこころ惹かれるものである。作者も笹百合に遭遇してこころときめいたのだろうが、存在感がある花だけに辺りの暗さに梅雨の兆しを不意に覚えたのであろう。

年寄の足昏れやすし花しやうぶ 城 孝子

年寄の足運びはゆっくりで頼り無げなもの。雅な趣の花菖蒲をめぐるその足運びにことさらそれを感じ、「足昏れやすし」の感慨となつたのである。最近、この作者の作品に「年寄」をキーワードとするものが増えたが、そこに自身を重ね合せる意識が働き始めたことが見て取れる。掲句の場合にも自身の足許への意識が感じられるだろう。

若き声入つてきたる菖蒲園 藤田 素子

前掲句と対照的な光景。優美な空気の流れる菖蒲園に、突然若やかな声の持ち主たちが入ってきた。この華やかさが菖蒲園の空気と不協和音となつて、その辺りだけが異質なアトモスフィアとなつたことが窺い知れる。その点を語らず読者に委ねたところが俳句の手柄である。

菖蒲田の足あと水にくづれけり 田中 文治

菖蒲に関わる句をもうひとつ。この「足あと」は園丁の長靴がつけたものだろう。何かの加減で水が漣たちその足跡がたちまちけぶつたのだ。すかさずその瞬時を捉え、本来の菖蒲田で菖蒲をはずした所に眼を向け、何気なく菖蒲田の実をおさえたと言えるだろう。(以下略)

恒星圈

天谷翔子

歳月を仰ぐ夏木立を仰ぐ
みどりの実むらさきの実や梅雨に入る
空の青閉ぢ込めてゆく根無草
菩提樹の花よ大地の水あげて
木の花は白こそよけれ海の鳴る

飯塚 糸子

緑さす肘に窪ある赤ん坊
緑風の抜ける書院の釘隠し
寺田屋へ続く道とる朝曇
亀を見にペットショップへ夏帽子
かたまつて泥に落ちたる早苗束

大山文子

夏浜をあるきぬママコノシリヌゲヒ
海光のとどく校舎の棕櫚の花
くちなしは一重なりけり萱の御所
青葉光僧の説明ねんごろに
葛切を手土産として姉きたる

篠山やくらがりに売る藺座布団
年寄の剥くゆで卵木下闇
あめんぼの鬼門の水に増えにけり
時の日の湾処に垂るる竿の数
鼓虫が鬼門の水をかきゐたり

奥田順子

滝が滝追うて奔れる鞍馬路
竹伐へ九十九折坂瀬を離るる
桑の実やダム放流のアナウンス
水無月や京もはづれの瓶覗
石臼をまはして祇園葛桜

獅子座

山尾玉藻推薦

川端俊雄

暑に向かふ丹波の壺の肩の張
咲き揃ふ菖蒲にくもる金屏風
虹消えし僧の話の嘘まこと
待たされてゐし夏鴨を見るとなく

涼野海音

短夜の汀に揺るるゴムボール
遮断機の向うに夜の雲の峰
幌掘の土盛られあり夏燕
蛙蛛の巢の向うの空の晴れてをり

田中文治

休日の県庁前の袋角
官教の女入りゆく木下闇
観音の両手ふさがる薄暑光
梅雨晴や盲導犬は人に添ひ

藤田素子

鳥声に緑深まる湾処かな
梅雨蝶や昼をともせる防犯灯
ダイエツト本のいろいろ梅雨長し
犬の目に涙台風接近中

根本ひろ子

睡蓮のそこはかとなき水匂ふ
下駄履きのうしろつきゆく鬼灯市
河骨の黄の信念をうらやみぬ
テラスより蔓直ぐに垂る日の盛

福本郁子

養生の鉢に日のさす菖蒲園
入梅や箱階段の鍔の数
抜きたての玉ねぎを下げ路線バス
バス停は海にむきををり雲の峰

西村節子

草刈を明日に持ち越す翁なる
葛城山の見るみる霽る余り苗
田草取つひに顔上げざりし
毛馬橋の見えかへせる船遊